



# 平兵士は過去を夢見る 3

ALPHAPOLIS

丘野 優

*Yu Okano*

アルファイト文庫 

カレン

テッド

ノール

トリス

フィー

魔法学院同級生

ジョンの同級生たち。カレンとテッドは  
タロス村出身の幼馴染でもある。

エリス・シュルプリーズ

剣姫エリスの異名をもつ、  
魔の森の碧の剣士。

クリスティアナ・マルキレギナ・  
フィニクス

ケルケイロの妹。お転婆で働き者。

ユスタ

巨大な狼のような魔物、クリスタル  
ウルフの一体。ジョンが生まれ育った  
タロス村近くの森に棲む。

ファレーナ

闇の気配を漂わせた、  
人ならざる美少女。  
前世からの因縁でジョンに力を貸す。

ケルケイロ・マルキオーニ・  
フィニクス

公爵家の長男。前世ではジョンの  
親友で、魔族に殺された。

ジョン・セリアス

本作の主人公。勇者が魔王を  
討伐した直後に死亡、なぜか  
赤ん坊から人生をやり直すことに。

## 第1話 失われたものにまつわる夢

俺、ジョン・セリアスの所属する王国軍は、魔族の本拠地を目指して街道をひたすら西に進んでいた。

道を共にする兵士たちは皆、表情が暗く、限界に達しているようだった。王都が魔族によって陥落し、やむなく遷都をしてから、それほど日は経っていない。

それにもかかわらず、王国は魔族へ反撃するために軍を新たに編成し、魔の森を越えた先にある魔族の本拠地へと送り込んだ。

王都の奪還も喫緊の課題だったが、そちらは騎士団が中心となって取り組んでいる。俺の所属する王国軍は、魔族へ反撃し、壊滅させるのが目的だ。

けれど、きつとこの遠征は失敗するだろうと強く予感しているからか、王国軍には絶望感が漂っているように思えた。

しかし、他に取るべき手段はなかっただろう。

我が国に限らず、他の国々においても政治体制の崩壊、戦力の減少は明らかで、このまま何もしなければ人類は緩やかに衰退し、歴史の波間に消えていくだろうことは想像に難くない。

だとすれば、たとえ滅亡が避けられないとしても、出来るだけ早い時期に戦力をつぎ込めるだけつぎ込み、魔族に渾身の一撃を加えて人類の意地を見せてやるべきだ——そう考えることは、むしろ勇ましく、潔い選択なのではないだろうか、という気さえしてくる。

とはいえ、新王都の貴族たちが精銳の騎士団を自分たちの手元に残しておくあたり、前線に派遣した俺たちを使い捨ての駒か何かだと思っっているような節もある。実際、そうなのだろう。

騎士団の者とは異なり、王国軍は個々人の技量が総じて低く、同程度の兵士などいくらでも代わりがきく。

だから、俺たちが魔族に突っ込んで大敗北を喫し、全滅に近い被害が出たとしても、それで人類の滅亡への道が一気に加速する、ということはない。

もともと、貴族たちだって、徒らに兵士を減らしたいなどとは思っていないはずだ。これしか手段がない、ということなのだろう。

だから、俺たちは死ぬ気で戦わなければならない。

それが、俺たちの人類に対しての責任なのだから。けれど、そんな風に無理矢理屈をつけて自分を鼓舞しようとしても、そう簡単にはいかない。

指揮系統は混乱し、物資も不足している。こんな状態では勝ち目はないだろう、と誰もが分かっているのに、どうにもならない。

やるせない気持ちになりながら、俺たちはそれでもなけなしの根性を奮い立たせて、前に進む——そうしなければ、戦場で心が完全に折れてしまうことを知っているから。

数日前に、重傷の伝令兵が馬からずり落ちそうになりながらも、戦線後方の砦にいる俺たちに伝えてくれた情報が脳裏を過る。

『魔の森の砦は、陥落した。』

敵、魔族は魔の森の砦を破壊しつくした後、本拠地へと帰っていった。

その理由は分からないが、注意されたし』

信じられない情報だった。

そしてそれが事実であるなら、我が国は、そして人類は、相当追い詰められていると

いっていいだろう。

魔の森の砦には、騎士団や軍の精鋭が配置され、あの闇の森の浸食から王国を守っていた。

一騎当千の猛者が何人もいて、難攻不落としかいえないような砦。それが魔の森の砦だったはずなのだ。

それなのに、誰が、どうやって、その砦を落としたというのか。

伝令兵から情報を聞いたとき、その場にいた誰もが思い浮かべた疑問だった。

ただ、俺の考えていたことは、みんなとは少しだけ違っていた。

なぜ、あの砦が落ちたのだ。

あの砦には父がいたのに。

忘れることのできない、衝撃。

そして、この目で確かめるまでは絶対に信じないと誓った。

その話を聞いたときには、すでに国王軍が編成され、魔の森を抜けて魔族の本拠地に向かうことも決まっていた。

つまり、俺が魔の森の砦の状況を誰よりも先に確認できることは確定していたのだ。

もう少しで辿り着くその場所が情報通りの状態でないことを祈りながら、俺は最後の丘

を登る。

そして——砦があったはずのその場所には、粉々になった石だけが無造作に転がっていた。



「……ジョン。おい、ジョン！」

振り返ると、そこには見慣れた金髪的美男子、ケルケイロが立っていた。

心配そうな表情で俺の顔を見つめている。

ケルケイロは俺の肩に手を置いて、何を言うべきか少し迷ったような様子を見せた後、口を開いた。

「そうだ……ジョン。砦は確かに、壊れたかもしれない。けれど、お前の親父さんは強い人だ、そうだろう!」

「……何が言いたいんだ?」

「まだ生存者がいるかもしれないってことだよ、馬鹿野郎! 捜すぞ! まだ終わってない! 何も!」

活を入れるようにそう怒鳴られて、俺はハッとした。

「そうだ、まだ終わってない。」

親父はそう簡単に死にやしない。

魔の森の砦にいた兵士たちだって、みんな強い人たちなんだ。

だから、どこかに身を潜めていて、魔族への反撃の機会を窺っているだけかもしれない。

「まだ諦めてはならない……」

ケルケイロの言葉で再び胸に火が灯った俺は、それからの行軍にも自然と力が入った。

小高い丘の上からは崩壊した砦の様子が良く見えたが、もう少し歩かなければ現地までは辿り着かない。

「……よし、ケルケイロ。もう少しだ。頑張ろうぜ」

頷いたケルケイロは、俺の言葉に力が籠り始めたことに気づき、にやりと笑って俺の肩を叩く。

「おう。それでこそ、俺の親友であり、アレンさんの息子だぜ！　いくぞ、ジョン！」

そうして、俺たちは砦に辿り着いたのだった。



遠くから見たただけで完全に崩壊したと分かる砦は、近くで見ると、当然ながら更にその惨状がよく分かった。

しつかりと組まれていたはずの石組みは粉々に砕かれて地面に散乱しており、赤黒くなった血液が地面や岩のあちこちに付着している。

魔の森の砦に詰めていた兵士や使用人の死体も多数転がっていて、魔物に食われたのか、身体の一部が巨大な獣に食いちぎられたようになっているものもある。

「……後で、埋葬してやらなきゃな」

歩きながら俺はそう呟いた。

「国を命がけで守った勇士たちだ。せめて、それくらいはやってやらないとならねえよ……」

ケルケイロは頷き、静かな声で肯定した。

もともと、俺たちは魔の森の砦で数日過ごしてから、魔の森の中に進軍していく予定だった。

想定していた砦での滞在時間を考えれば、彼らを埋葬する時間くらいは確保できるだろう。

それに、散乱している物の中には、貴重なミスリルで作られた防具をはじめとして、未だ使える武器や、未使用の薬品類など、様々な物資がある。

物に溢れて（あふ）いたかつての時代ならともかく、王都を奪われてから物資は不足していくばかりだった。

物流システムがほとんど崩壊してしまっているのが一番の要因だが、そもそも生産地自体が魔族に襲撃されて機能不全に陥（おち）っている、ということもある。

魔族に奪われた地を奪い返そうにも、戦力が足りず（た）にどん魔族に押されて、また重要な拠点を奪われ——と、その繰り返しなのだ。

「それから、俺たち人類はこれほど強く感じたことは、かつてなかった。」

「逆転（さかさま）の芽は、あるのだろうか。」

「それとも、俺は——俺たちは、このまま魔族の力に押されて絶滅していく運命なのだろうか。」

「誰かに、教えてもらいたい。」

「それを知っている者がいるのなら、どうか教えてくれと、そう思った。けれど、当然だが言葉など返ってくるはずがない。」

「信じるべき神など、いないのだ。」

「何に祈（いの）っても、誰かが俺たちに応えてくれることなどないのだ……」

「何（なに）難（がた）しい顔（かほ）をしてるんだよ」

「ケルケイロが瓦礫（がれき）の上を歩きながらそう言った。それから近くの岩に腰かけて、手招き（てまね）する。」

「国軍の兵士たちは瓦礫（がれき）の中を歩き、使えそうな物を拾ったり、生き残りがいないか探したりしている。」

「俺もケルケイロと組んで等距離を保ちつつ、みんなと同じ作業をしていた。」

「しかし、流石（さすが）にずっと中腰（ちゅうよう）でそんなことをし続けていれば疲れる。」

「ケルケイロもそろそろ限界に達して、休みたくなつたようだ。」

「俺もケルケイロが腰かけた岩の対面に座り、少しばかり休むことにする。」

「俺たちは……このまま終わっちゃうのかと思っただよ」

「俺たちって……人類（じんるい）がってことか」

「ああ」

「頷いた俺に、ケルケイロは少し考えてから言う。」

「『どうなんだろうな……小さなころから、『いつも神様は見えておられる。人が信仰の心を』』」

忘れない限り、必ずや救いの光はもたらされるであろう。たとえ、それが終焉間近であっても』……なんて説教を教会で聞き続けた俺としては、大丈夫だと神に誓って宣言するのが正しいんだろうが……」

「へえ……お前、信仰心なんてあつたんだな」

そんなものは欠片も持ってなさそうな性格をしている男である。

ケルケイロの口から出る台詞としてはあまりにも意外なので、俺の口調は少し茶化すようなものになった。

そのことを察したケルケイロは、真剣な表情で続ける。

「おいおい、真面目な話だぜ。ま……別に俺だって、神様に祈ってりや全部大丈夫だ、なんて無責任なことば思っただけよ。そんなこと言う奴は、教会の司祭だけで十分だ。ただ……俺はさ、そうやって希望を持ち続けるっていうことは、大事だと思っただけだ。だって、なんとかなる、なんとかする、って思っただけで……初めからどうせダメだと思っただら、なんとかなるものもダメになっちゃうだろう？」

「言いたいことは分かるけどな……」

「ま、つまり、そう思うための後押しとして、何かが必要で何かに縋りたいっていうときに、神様に頼るのはそんなに悪いことじゃないと思っぜ」

ケルケイロの信仰とは、そういうものなのだろう。

ここ最近、軍の中で司祭や司教の数が増えてきている。

それは、回復・浄化魔法を扱えるのが彼等しかないためであるが、手持無沙汰なときや時間が空いたときに、司祭たちから説教や告解を受けている兵士も多くなってきた。

なぜだろうか、と思っていたが、それはつまりケルケイロの言うように、最後の抛り所としての神を必要とする者が増えたからかもしれない。

平和な時代には滅多に肌を感じなかった死の気配が、こここのところ特に濃密に漂っているように思うときがある。

それは夜、眠りに落ちるその瞬間だったり、特に何の変哲もない昼下がりの行軍中、完全な無音になった一瞬のことだったりする。

ふと、思うのだ。

ああ、近々、誰かが死ぬなど。

気のせいかもしれないし、ただの考え過ぎなのかもしれない。

けれど、魔族の脅威が昔よりも遥かに増した現在において、そう思った次の瞬間に、自分の隣に立っていた者が一瞬で命を散らすということは、決して珍しくないのだ。

そして、一度でもそれを経験した者は不安から逃れられなくなっていく。



死の息吹が自分にかかる瞬間を恐れ、前線に立てないどころか、武器に触れることすら出来なくなる者もいるくらいだ。

俺もまた、いつ自分がそうなってしまうのか分からない。

こいつは大丈夫だと信じていた、そして本人も絶対に大丈夫と言っていた同僚が、何人も恐怖に負けて戦意を失っていったのを見ている。

彼らの中には軍に戻って来られた者もいたが、二度と武器を握れなくなり、後方で支援業務をこなすことしかできなくなった者も少なくない。

「……俺も、何か信じてみるかな」

ふと、不安になってそう言うと、ケルケイロは笑って言った。

「そんな風に言えるうちは、信じなくてもいいだろう。もしお前が何かに頼らずにはいられなくなったら……」

「なったら？」

「まず、俺を頼ることだな。親友」

そう言って笑い、拳を差し出してきた。

俺はその仕草に引きつっていた表情が解けていくのを感じ、自然と笑って、ケルケイロの拳に自分の拳を合わせて言った。

「ああ……そうだな。きつとそうしよう。だから親友」

「ん？」

「絶対に死ぬなよ」

そう言った俺の言葉に、ケルケイロは爆笑した。

「当たり前だ。俺を誰だと思ってるんだよ。危なくなったら誰よりも先に最後方に下げられる、公爵家子息様だぞ？」

貴族の身分など好きじゃない癖に、そんなことを言ってくれて俺を笑わせてくれるケルケイロ。ああ、俺はいい友達を持った。

こいつは決して失いたくないと強く思い、改めてこの巡り合わせに感謝したのだった。

## 第2話 襲撃

——がたん、ごとん。

馬車の揺れによって、微睡の中から無理矢理引きあげられる。

また、前世の夢を見ていた。

苦しみと絶望が交互に巡っていた、あの時代の夢を。

今世では、絶対に現実にはならない……夢。

「……お、ジョン、起きたか？ そろそろ目的地に着くみたいだぜ。見てみろよ」

そんな俺の気分とは正反対な、明るく希望に満ちた声が聞こえた。魔法学院の同級生ノールだ。

言われた通り、俺は馬車の窓から顔を出して外を見てみた。

馬車の進行方向には、一体どこまで続いているのだろうかと疑問に感じてしまうほど長大な石壁が、遙か遠くまで延びているのが見える。

何のためにあの壁があるのかといえば、それは魔物の襲撃から王国を守るために他ならぬ。

石壁の起点には俺たちの目的地である堅固な砦——魔の森の砦が鎮座している。それは、まるで国を守るために石壁の羽を広げているようにも見えた。

魔法学院に入って、三年が経過していた。

俺はあれから成長し、体も少し大きくなった。

俺はまだ十歳に過ぎないが、同級生のテッドは十四歳で、もう大人といってもいいだ

ろう。

魔法学院の卒業には、まだあと二年ほどある。

それなのにどうして俺たちがこんなところ——魔の森の砦を目指しているかといえば、それは魔法学院のカリキュラムのためであった。

魔法学院は言わずと知れた魔術師養成学校である。

魔術師は貴重であり軍事的有用性が高いため、魔法学院の卒業生は国の機関に所属することが前提となっている。つまり、職業の自由が大幅に制限されているのだが、その代わりに国は卒業後の就職に大きな便宜を図っているのである。

魔法学院を卒業すれば基本的にエリートとして扱われる。軍や騎士団所属の場合は士官ないし幹部候補生として、宮廷付きの場合は高位官僚としての道がほぼ約束されているのだ。

そのため魔法学院のカリキュラムでは、三年生から毎年、騎士団や軍で一定期間の実地研修を積むことが課せられている。

研修場所には多くの選択肢が設けられており、大抵は本人の希望が通るようになっているので、魔法学院生はこの実地研修を楽しみにしている、というわけだ。

俺は初め、どこにするか非常に迷ったが、ふとファレーナとの契約を思い出し、魔の森

に行くのが一番いいのではないかと思った。

契約の大まかな内容は、あいつに魂を食わせてやる代わりに、彼女の力を貸してもらおうというもの。

ファレーナは魂を糧として存在を維持している。彼女は契約したときに俺の魂を半分食ったが、それでは足りず、俺の魂が必要だと言った。それがなければ、自分を維持できなくなる、と。

今の俺に竜を狩れるのかは疑問だが、魔の森であれば竜と遭遇することはできるだろう。そして、魔の森の砦で竜を倒すための手がかりを得られるかもしれない。

実地研修の場所は個人個人で好きに決めて良いので、俺は誰も誘わず一人で行くつもりだった。

けれど、俺の行き先を聞いたノール、それにフィーとトリス、さらにはカレンに、テッド、フィル、オーツ、ヘイス、コウト、同級生の知り合い全員が、魔の森の砦を研修場所に決めてしまった。

そして今、参加者十人は二台の馬車に分かれて乗り、魔の森の砦を目指しているところだ。

四年生、五年生でも実地研修は行うので、本当に自分の就職したい場所に行くチャンスはあと二回ある。だからまあ、一年くらいはバカンス気分が好きなどころに行くというのもありだ。

もちろん、研修なのだから、本当にバカンス気分であらける、というわけにはいかなかった。

魔の森の砦は例年希望者がほぼゼロだったらしいので、砦の責任者から驚きの声が上がった、と魔法学院学院長のナコルルから聞いた。

俺の父アレン・セリアスは魔の森の砦に勤めているため、砦の責任者は研修希望者「ジョン・セリアス」の名前を聞いて納得したらしい。

最後には歓迎すると言ってくれたので、俺は問題なく魔の森の砦で研修が出来ることになった、というわけだ。

「別に、お前らまで来なくても良かったのに」

俺が同じ馬車のノールとトリス、フィーにそう言うと、まずノールが口を開いた。

「最初の研修くらい仲のいい奴と一緒にいきたいじゃないか。それに一回、軍の砦は覗いてみたかったしな。騎士団と比べたいから、いざれ行くつもりではいたんだ」

「私も最初は仲のいい人と行くというのは賛成ね。それに私、魔の森に興味があったの

よ……危険地帯だから、国の許可がなければ近づくことも出来ないし」

植物や水に宿る精霊との高い交感能力をもつ黒貴種らしいトリスの台詞に、俺は納得して頷く。

「ぼくは鍛冶師と錬金術師に会いたいわって。特に魔の森の砦には、いい鍛冶師がいるって聞くし。やつぱりミスリルなんかは腕がないと難しいからね」

最後にそう言ったのは、匠種の僕っ娘フイー。

意外にも、今回の研修を魔の森の砦にした理由はそれぞれにすっかりあるようで、安心する。

俺と同じタロス村出身のテッドたちは、もともと魔の森の砦に行つてみたいと話していた。

彼らには、俺の親父が魔の森の砦の話の色々していたし、興味が生まれるのも当然だろう。

そういうわけで、今回ここに来たのは、本当に魔の森の砦に興味がある面々なのだ。

流石に将来のために必要な研修を、友達と一緒に行きたいから、というだけでは決めないか。

そんなことを考えながら、俺は改めて馬車の窓から首を出して砦の様子を見る。

すると突然、地面が大きく揺れた。

馬車が即座に停止すると同時に、轟音が鳴り響く。

何が起こったのかと、俺は窓から首を出したまま周囲の様子を確認する。

すると、魔の森の砦の両端から延びている石壁の一部が崩れ、もくもくと土ぼこりを上げているのが見えた。

「壁が壊れている……?」

「本当か!? おい、ちょっと見せてくれ!」

そう言ってノールも後ろから身を乗り出し、俺が指し示す場所を見た。

彼は驚いて声を上げる。

「おいおい、マジじゃねえか! ありやばいんじゃ……魔の森の砦の石壁が壊れたってことは、壊した奴が向こう側にいるってことだろ……?」

「ま、十中八、九そうだろうな」

ノールの予想は、おそらく当たっている。石壁は魔の森の魔物に破壊されて崩れたのだろう。

そしてしばらくすると、がらがらと崩れる壁の中から、とてつもない大きさの黒山羊が姿を現し、蹄を鳴らしながらこちらを一瞬見た。

「……やばいぞ、あいつ狂山羊だ！ あんなに大きいの初めて見た……こっちに向かってくる！」

狂山羊は魔物の中でも強力な部類である。

魔法を扱い、狡猾で賢いという点も厄介だが、それ以上に強烈な突進攻撃が脅威で、突撃山羊の異名を持つ。

体長は普通は三メートル前後であり、今、石壁辺りに現れた奴ほど大きいものは滅多にない。

「確かあの石壁って、十メートル前後だったよな……？」

ノールが俺にそう尋ねる。

「ああ、そんなもんだな。つまりあの狂山羊の大きさは、十メートル近いってことになるだろう……」

「おいおい、嘘だろ!？」

「だから、あの森は魔の森って呼ばれてるんだ」

そう、魔の森の恐ろしいところは、そこにいる魔物が通常よりも遥かに強力なものへと育ってしまったところにある。

本来ならさほど脅威にならない魔物も、あの森に棲んでいるものとなると話が変わる。

それは、あの狂山羊だけを見ても明らかだ。

「あれがこっちに突進して来たら……どうなると思う？」

恐る恐る聞いてくるトリスに、俺は至って冷静に答える。

「まあ、馬車は大破だろうな……ってわけで、とにかく奴を止めないといけないだろう。出るぞ」

「ええ!? ほんとに!？」

フィーがそんなことを呟きながらも、既に愛用の大斧を持って準備している辺り、やる気は十分ということだろう。血の気の多さは出会ったときからずっと変わっていない。

トリスとノールもすぐに準備を終え、俺たちは馬車から降りた。

とはいっても、あれを仕留めるのはそんなに簡単ではなさそうだ。さて、どうしたのか。

突進してくる狂山羊を眺めながら考えていると、もう一台の馬車からテッドたちも出てきた。

「おい、ジョン！ 俺たちはどうすればいい!？」

その言葉で、俺は次の行動を決めた。

「奴の突進を止めるために協力してくれ！ 壁を何枚か作れば……まあ、なんとかなるだ

ろ！ その後は俺たちが攻撃を加えるから、馬車を守って砦まで行け！」

「おう、分かった！」

テッドたちとは、昔からずっと一緒に森で狩りをしてきた仲だ。

これくらい大雑把おおざっぱな打ち合わせでも、十分に対応できるだろう。

問題は狂山羊イシゴエムスルの巨大さだが、タロス村の森の中で、俺たちは友人になったクリスタルルフたちを相手に、色々と訓練をしてきたのだ。

さすがに十メルテには及ばないが、彼らの中でもユスタは七メルテ近かったはずだ。ユスタの突進力を想定すれば、あの狂山羊イシゴエムスルも何とかなるのではないだろうか。

「何とかならなかつたら、そのときは——逃げるぞ」

俺はその場にいる全員にそう言い、突進してくる狂山羊イシゴエムスルに向き直った。

それぞれが呪文を唱え、魔術の壁を築き始める。

土、水、風、炎、氷など様々な属性で構成された壁が、狂山羊イシゴエムスルの目の前に現れた。

タイミングを計りはか、こちらに狂山羊イシゴエムスルが到達する直前に魔法を完成させたため、狂山羊はルートを変えることも出来ず、そのまま色とりどりの壁に突っ込むことになった。

しかし、十メルテの巨体と、その身体を支える強靱きょうじんな筋力が生み出す突進力は恐ろしく、壁は一枚、二枚と、がりがり削けずられて押し込まれていく。

皆の表情を見るとかなり辛そうで、このままだと押し負けそうな気さえてくる。

「頑張がんばれ！ もう少し耐えれば止められる！」

俺がそう言うのと全員が頷き、魔術にも力が入った。

押され気味だった壁が少し力を取り戻し、狂山羊の突進力を徐々に削っていく。

そして、俺たちの魔術の壁に狂山羊イシゴエムスルは完全に抑おさえ込まれ、その場に停止した。

とはいえ、ここで終わりというわけではない。

再度突進されては意味がないのだ。

助走がとれない距離だから止めやすくはあるだろうが、それでも馬車を破壊されかねない。

俺たち——俺、ノール、トリス、フィーの四人は、狂山羊イシゴエムスルの突進が停止すると同時に奴の横に回り、足を攻撃することにした。

その間に、テッドたちには馬車に戻って砦に向かうよう指示をする。

二台の馬車の後部には人が立ち、追撃を警戒しながら遠ざかっていった。

それを睨にらみつける狂山羊イシゴエムスルであったが、足元でちよるちよるしている魔術師四人を先に始末することにしたい。

ぶるぶると頭部を振り、頭についている、くるくるとした角つのを光らせ始めた。

「やばい、魔法だ！」

俺が叫ぶと、ノールたちはそれぞれ自分を覆うようにドーム状の魔術壁を張り、狂山羊の魔法に備えた。俺も続いて魔術壁を作る。

そして次の瞬間、俺たち四人に向かって狂山羊の角から雷撃が放たれ、辺りの平原の地面を焦がした。

俺たち四人は皆、防御に成功し、魔術壁は雷撃を防いでもなお健在である。雷撃が止んだのを確認すると、俺たちは再度攻撃に移った。

こういった巨大な魔物を倒すためには、まず足を狙って潰すのが定石である。それを分かっているからこそ、俺たち四人とも足を攻撃しているのだが、さすが魔の魔物というべきか、おそろしく硬くて剣も魔術も中々通らない。

全く効いていないわけではないだろうが、その足はまるで数百年もの月日を経た樹木のように太く、いくら攻撃しても物ともせずに、俺たちを踏み潰そう、蹴り上げようとしてくるのだ。

「……くそっ……」

このままではジリ貧か、と思ったそのとき、砦の角からガシャガシャと鎧の鳴る音が聞こえてきた。

狂山羊に注意しながら音のする方をちらりと見てみると、兵士が隊列を組んで向かってきている。

その最前列で彼らを率いているのは、大剣を持った女性である。彼女は俺たちを見やりながら、狂山羊の前に飛び出して叫んだ。

「あんたたち、よく持ちこたえた！ あとはあたしに任せな!!」

その声とともに、兵士たちの唸り声が響く。おそろく、砦から来た兵士たちだ。

魔の森の魔物の討伐は、彼らの専門分野である。彼らに任せて大丈夫そうだ。そう思った俺は、他の三人に向かって叫ぶ。

「おい、お前ら、下がるぞ！」

俺たちは少しずつ後方に下がろうとしたが、兵士たちから離れすぎて孤立したところを狂山羊に狙われては危険だ。

そう思った俺たちは、安全な場所に身を潜めて兵士たちの戦いを見守ることにしたのだ。

### 第3話 兵士の戦い

兵士と狂山羊イェンツェムスネルの戦いは素晴らしいものだった。

兵士たちの能力は、それほど高くはない。

魔法を使える者は少なく、兵士のほとんどは魔術師からの支援を受けながらも、自分の身体能力だけを頼りに戦っている。

しかしそれでも、俺たちが狂山羊イェンツェムスネルと戦っていたときよりは、明らかに相手を押していた。大剣を掲げた女性剣士率いる魔の森の砦の兵士たちは、俺たちが苦戦していた狂山羊イェンツェムスネルを巧みに翻弄カタカし、損耗ヘンコウも殆どなく、徐々に化け物の体力を奪っていく。

冷静に考えれば分かることだが、あの巨体である。

身体の動きを維持するためには大量の魔力が必要らしく、スタミナはあまりないようだ。兵士たちの統制のしつかり取れた戦いに振り回され、狂山羊イェンツェムスネルの動きはだんだんと鈍にぶくなっていった。

「やっぱり本職は違うな……」

ノールが呟くようにそう言った。

「ああ。個人の能力自体は魔法学院の生徒も負けてはいないだろうが、技術や知識、経験が違うってことがよく分かる」

兵士たちの動きは全て、狂山羊イェンツェムスネルの行動パターンや性質を知り抜いているもので、おそらくは予想外の攻撃などというものはないのだろう。

単純な踏みつけや蹴り飛ばしでは兵士たちを仕留められないと考えたのか、狂山羊イェンツェムスネルは俺たちに放ったのと同様の雷撃の魔法を放つ。

しかし、兵士たちは個々で魔術壁を形成することなく、二、三人の魔術師が全員の頭上に大きな一枚の魔術壁を築いただけで防いでしまった。

狂山羊イェンツェムスネルがそういった魔法を使用すると知っていなければ出来ない対応だし、仲間の魔術師が必ず防いでくれると信頼していなければ、兵士たちは恐ろしくて戦っていられないだろう。

間違いなく、彼らが一流であることが分かる。

そうして攻撃方法を全て防がれた狂山羊イェンツェムスネルはなす術すべがなくなり、仕方なく無効な攻撃を繰り返すしかなかった。

けれど、それはいたずらに体力を擦り減らす結果しか招かない。



限界に達したららしい狂山羊の頭が少し前に垂れた瞬間を、隊長らしき女性剣士は見逃さなかった。

「お前ら、下がれッ!!」

号令の直後、ザツと音を立てて兵士全員が狂山羊から距離をとった。

「何をやる気かしら？」

首を傾げるトリスを横目に女性剣士に注意を向けると、彼女は持っている大剣を構えて集中し始めた。

その瞬間、大剣に魔力が通されるのを、俺は確かに見た。

「あの人は……魔剣士だ!!」

近接戦闘の攻撃手段のなかでも、最も強力で使い手がほとんどいないと言われる力。

俺の親父アレン・セリアスと同様、女性剣士も、その才能の持ち主だったらしい。

彼女の持っている大剣は魔力と反応して赤く輝き、強い衝撃波を放った。

狂山羊はその剣の恐ろしさに気付いて、一瞬仰け反ろうとするも、時すでに遅し。

飛び上がった女性剣士の大剣が目にもとまらぬ速さで振り切られる。

斬撃の音が聞こえたか、どうか。

不自然なほどの静寂が一瞬辺りに広がると、その直後には狂山羊の首に一筋の赤い線が

走り、ずらず、と音を立てて首と体がずれていく。

そして、ずずん、と狂山羊の首が地面に落ちると、数秒後に身体も地面に倒れたのだった。

文句なしの一撃、文句なしの勝利である。

「あれと同じことが、お前の親父さんにも出来るわけだ……」

ノールがふつとそんなことを呟いたので、俺は頷く。

「ああ……だから、俺は親父に、兵士に憧れたんだよ……」

その決意は、前世の俺を最終的に魔王の城まで連れて行ったのだ。

俺たち四人は感嘆を漏らして、倒れた狂山羊と、その周りで勝鬨をあげる兵士たち、それに最後の一撃を加えた女性剣士を見ていた。

すると、彼らもこちらに気づいて手を振ってきたので、振り返す。

女剣士に手招きされた俺たちは何の用か分からず顔を見合わせ、兵士たちの方へと走って行ったのだった。



「あんたたち！ 大丈夫だったかい？ 怪我は!?」

近くに行くと、あの魔剣士の女性が開口一番、そう言って俺たちを心配してくれた。

俺たちはお互いの様子を確認してみるも、誰一人として怪我を負っていない。そこで、俺が代表して返答する。

「誰も怪我はしてないみたいです。本当に助かりましたよ……あのままでは、おそらくやられていましたから」

すると、女性魔剣士は笑った。

「あれだけ持ちこたえられただけでも、私はあんたたちを評価するよ。狂山羊<sup>クレイブ・スミス</sup>についても、魔の森の魔物だからね……それも、普通の奴の三倍はデカイ。おそらくこいつは群れのボスだったろう……魔法学院の三年生なんかの手に負えるようなもんじゃない。それを……ほんとによくやったよ！ あんたたちもそう思うだろ!」

女性魔剣士は振り返り、その場にいる兵士たちに同意を求めた。

全部で十四、五人いるが、その中で魔術師は二、三人。

この人数比からも魔術師が稀少<sup>キョウシウ</sup>であることが分かるが、実は一部隊に二、三人は多い方である。

魔の森は王国の中でも危険な場所であるため、比較的多めに魔術師が配置されている

のだ。

これが他の土地の砦となると、もっと少ないだろう。

魔の森の砦には、確か常時十人以上の魔術師が配置されていたはずだ。

兵士たちは女性魔剣士の言葉に応じて、口ぐちに俺たちを褒めてくれる。

自分たちでもそれなりに頑張ったと思うが、やはり決定打がなく、あれ以上どうにもできなかった。それが悔しい。

俺が、この時代ではまだ普及<sup>フキヤク</sup>していないナコルル式の魔法を使えばまた違ったのかも知れないが、それは最終手段だ。

先ほどの狂山羊<sup>クレイブ・スミス</sup>の場合、逃げるだけならナコルル式魔法を使うまでもないと判断して使用しなかった。それに、これまで旧式魔法の訓練も積んできたのだから、それで対処できると思ったのだが……

その悔しさを漏らすと、女性魔剣士は肩を竦めた。

「まあ、確かにさっきまでは打つ手なしだっただろうけどね。でも、今はもう違うだろう？ あんたたちの目を見ると……どうもそんな感じがするよ」

どうやら、相当評価されてしまったらしい。

確かに、俺は魔法学院に入学して以来、ノール、トリス、フィーに、戦いの際には常に

考えるように言ってきた。勝ったにしろ、負けたにしろ、また戦いの最中でも、どうやれば勝てるかを徹底的に考えるように、と。

それは今やほとんど彼らの癖になっており、先ほどの兵士たちの戦いを見て、それぞれ思うことがあったに違いない。

狂山羊の性質を巧みに利用し、スタミナ切れを狙っていく戦い方なら、俺たちにもおそらく出来た。

それに、各自が思い思いに戦うのは、あの雷撃があることを考えると愚かな選択だったといえる。

誰か一人が先ほどの兵士のように頭上に魔術壁を形成して雷撃を防ぎ、その間に他の三人が徹底的に攻撃を加える、そして足を一一つ確実に潰していく、という戦法をとっていれば、勝てた可能性は高い。

俺がそんなことを話すと、女性魔剣士は頷いた。

「ふむ……確かにそれなら可能性はあったかもしれないね。しかし、意外なものだ。魔法学院から十数年ぶりに研修生がやってくると聞いて、よっぽど魔の森を舐めたガキが来るんじゃないかと皆で思ってたところだ。けれど、来たのはあんたたちだった……面白いね。歓迎するよ。……おっと、荷馬車が来たね」

俺たちが魔法学院の研修生であるということは、すっかり分かっていたらしい。

まあ、俺たちは馬車に乗って来たし、いつ頃、何人来るかくらいは把握していただろう。だからこそ、すぐに助けに來られたのだ。

皆の方を見ると、確かに女性剣士の言う通り、何台かの荷馬車がこちらに向かってくる。

「あの荷馬車は何のために来たの？」

フィーが尋ねると、女性剣士は微笑みながら答える。

「そりゃあんだ、狂山羊を運ぶためさ。魔物の肉は美味しい。強ければ強いほどね。この狂山羊も間違いなく相当な美味さ。魔の森の皆の何が楽しいって、飯が美味しいことさね！」

確かに魔の森の皆ほど、強力な魔物の肉に毎日ありつける場所はなかなかないだろう。

「恐ろしく危険」という但し書きが必要だが、それは誰もが分かっていることだ。

それでもこの皆に來る者を物好きと呼ぶならば、俺たちだってまさにそれに該当する。

「ま、そんなわけだから、皆に行くのは狂山羊を切り分けた後になる。少し時間がかかるが許しておくれ」

「いえ、全く構いませんよ。よければ解体しているところを見せて頂けませんか？ 実のところ、狂山羊の解体は見たことがなくて」

タロス村周辺に、狂山羊は出現しなかった。だから、その解体も見ることがなく、俺と

しては興味がある。

魔物料理は母さんが得意なのだが、俺もその影響を受けて、魔法学院に来てからしばらくして趣味のように料理をすることが増えてきた。

前世では決してやらなかったことだが、やってみると意外に面白く、奥が深いものだと感じている。

ノールたちは俺のそんな趣味を理解しているからか、俺の解体見学の申し出に特に文句も言わず、むしろ自分たちにも見せてほしい、と一緒にやって頼んでくれた。

女性剣士は、豪快ごうかいに笑った。

「はっはっは、ほんとにあんたたちは面白いねえ……先に砦に行った子たちも、あんたたちみたいなのかい？」

「俺たちみたい、というのがどういうことなのかは分からないですけど、先に行った奴らはみんな俺と同じ村の出身ですから……似たような奴らではありませんね」

そう答えると、女性剣士はへえ、と頷いて質問を続ける。

「あんた、どこの村の出身なんだい？」

「タロス村です」

「タロス村……タロス村って、アレンのいるタロス村!？」

ずいぶんな驚き方だったので、俺は少し面食らいながら頷く。

「はい、そうですけど……アレンは俺の親父です。それが何か？」

「あんたがアレンの息子かい！ いやあ、本当に面白いなと思ってね。そうだ、ここらであたしの自己紹介をしておこうか？」

「あ、申し訳ありません。俺たちもまだしてませんでした。俺はジョン、こっちはノール、それにトリスと……フィーです」

俺が紹介すると、それぞれ頭を下げた。

女性剣士はゆつくりと頷いて、それぞれの顔をしっかりと記憶するように眺めながら一人一人の名前を復唱ふくしょうした。そして、それぞれと握手をする。

「ああ、よろしく頼むよ。これからしばらく、砦と一緒に生活するんだからね。それで、だ。私の名前はエリス。エリス・シウルプリーズだ。……それともこういう方が分かりやすいかね。剣姫けんきエリス、と」

その言葉に、俺は目を見開いて驚く。

剣姫けんきエリス。

その名前に、俺ははつきりと聞き覚えがあった。確か、魔法学院学院長のナコルルから聞いたのだったか。

## 立ち読みサンプル はここまで



かつての闘技大会——当時、魔法学会から追放されて落ち込んでいたナコルルが勇気づけられたというその大会において、親父と熱戦を繰り広げたという女性剣士。

それこそが、剣姫エリスに他ならない。

彼女が魔の森の砦に勤めているという話は、親父からは一度たりとも聞いたことがなかった。いつもの親父らしく、単に言わなかっただけなのだろうか？

いや、違う。

前世で魔の森の砦を捜索したとき、ここにいと聞いていた兵士たちの名前の中に、彼女の名前はなかった。

おそらく何らかの事情で、彼女は今、ここにいることになったのだろう。その理由は、あとで聞けば分かるはずだ。

それにしても、まさかこんなところで彼女に出会うとは思わなかった……

驚いている俺の顔を見て、剣姫エリスは笑った。

「いやはや……そこまで驚くとは思わなかったよ。あんた、アレンとは違う性格をしているみたいだねえ……」

そういえば前世の記憶によると、この時期、親父も砦にいます。

それを思い出してエリスに聞いてみると、親父は今、別の地域の騎士団のところに行っ